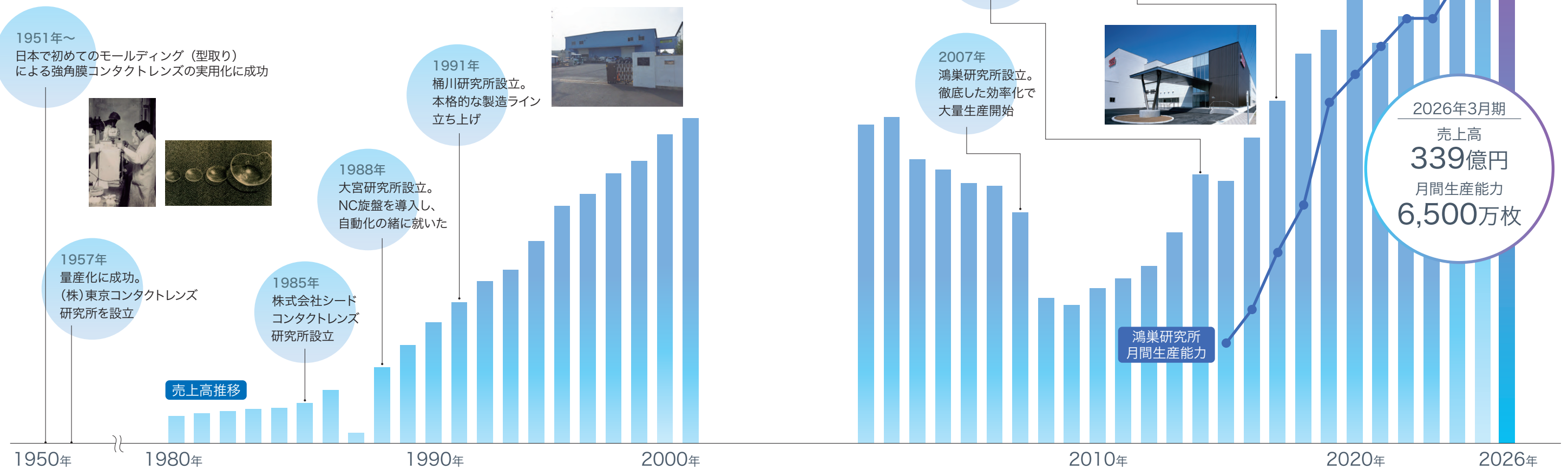


高品質な製品をお届けしたいという想いで、 一人ひとりの「みえる」に貢献

シードの歴史は、義眼製造を営む厚澤弘陳が、順天堂大学に協力する形でコンタクトレンズの研究に着手したところから始まりました。創業当初は、一人ひとりの眼に合わせ手作業で度数を調整する製法でした。丁寧なものづくりで高品質な製品をお届けしたいという精神は、今のシードにも受け継がれています。



コンタクトレンズの普及

日本で初めてコンタクトレンズの研究を開始し、 量産化に成功

1951年、創業者の厚澤弘陳が日本初となるモールディング（型取り）によるコンタクトレンズの研究開発をスタートさせました。1957年にはコンタクトレンズの量産化に成功し、東京都文京区に現在のシードの前身となる「株式会社東京コンタクトレンズ研究所」を設立しました。ハードコンタクトレンズが主流だった1972年、日本初のソフトコンタクトレンズを発売。装着感の良さから徐々に需要が高まり、その後も品質を追求し改良を重ねました。1985年には、ブランド名を「シード」に変更しました。1988年には製造工程の自動化が実現し、コンタクトレンズ普及に向けた基盤ができました。

使い捨てレンズのニーズ増加・ 高機能素材の進化

国産初の使い捨て ソフトコンタクトレンズを発売

1991年、桶川研究所が設立され、本格的な製造ラインを確立。1993年には「眼の専門総合メーカー」として眼鏡事業にも参入しました。さらに同年、日本市場に1週間タイプの使い捨てコンタクトレンズが海外から投入されます。衛生面の問題がクリアされたことで一気に需要が高まり、1997年にはシード初の2週間交換型のコンタクトレンズを発売しました。その後、市場は1日使い捨てコンタクトレンズの

次世代素材の開発

多様化するニーズに応え、 時代に先駆けて付加価値のある製品を開発

需要拡大によりさらなる大量生産が求められ、2007年に60億円を投じて鴻巣研究所が竣工。国産初の高品質な使い捨てコンタクトレンズの大量生産を実現しました。

2010年代以降は、時代とともに変化するニーズを捉え、視力矯正の効果があるオルソケラトロジーレンズや、眼圧変動を測るセンサーが搭載されたスマートコンタクトレンズ等、時代に先駆けて新たな付加価値のあるコンタクトレンズを製品化してきました。近視・遠視用だけでなく、乱視用・遠近両用等、多様化するニーズに応える多種多様な製品を続々と発売。また、2012年に発売した、新発想のサークルレンズがさらなる成長を支えました。「日本のシードから世界のSEEDへ」、日本のみならず海外へも積極的に展開しています。シードはこれからも未来に種をまき、多様な「みえる」喜びを創造できる社会を実現することを目指します。